

主体的な学習を支援する教育情報基盤と学習環境

岩 崎 公弥子 大 橋 陽
Kumiko IWAZAKI Akira OHASHI

Enhancing Students' Self-directed Learning by Information Systems and
Learning Commons in Higher Education

はじめに

近年、高等教育にパラダイムシフトがおきている。それは、「教育パラダイム」から「学習パラダイム」への転換である。具体的には、「教師主体から学習者主体へ」、「受動的な学びから能動的・自律的な学びへ」「暗記から経験による学びへ」「授業の提供から学習の生産へ」等、学習者に力点を移した新しい学びが提唱され、様々な教育手法が試みられるようになったのである。さらに、この転換にともない、「テストからポートフォリオへ」「能力測定からピアアセスメントへ」といった評価方法にも転換が起これ、教育情報基盤においては、「CAI（コンピュータ支援教育）からCSCL（協調学習支援システム）へ」と知識教授型から協働作業型のシステムへとその主たる役割が移っている¹。

本論文では、このようなパラダイムシフトを背景に、今後、高等教育機関がどのような教育情報基盤や学びの環境を整備したらよいかを、香港の大学の事例をもとに考察する²。香港は、それまで、イギリス型の初等教育6年、中等教育5年（前期3年、後期2年）、大学進学予科2年、大学3年の「6-5（3-2）-2-3制」をとっていたが、2009年9月から学校制度が変更され、「6-3-3-4制」へと移行した。これを機会に教育の抜本的見直しがなされている。そこで、教育改革の只中にある香港から学ぶことは大きいと考え、香港城市大学、香港大学の調査を行った。

第1章では、高等教育における学びと環境整備について概観し、第2章で、新しい教育手法のひとつであるeポートフォリオに焦点を当て、香港城市大学の試みを紹介する。

¹ 森本（2011）、p.425。

² 2012年度、岩崎が香港城市大学、大橋が香港大学の視察を行った。視察のレポートは、岩崎・大橋（2013）を参照のこと。

続く、第3章では、学習者主体のカリキュラム改革について香港大学の事例をもとに考察し、第4章で、学生の自律的な学びを支援する学習環境について述べる。

1. 高等教育における学習と教育環境

1-1. 21世紀の教育のあり方をめぐって

近年の急速な情報化とグローバル化を背景に、学生が社会に出る前に修得しなければならない知識やスキル・能力が量的にも質的にも変化してきている。社会が多様化し、変化の激しい時代を生き抜くのに必要な力は、専門知識だけに止まらず、自ら課題を発見し、柔軟に考え、複雑な課題を解決する力、すなわち、「総合的な知」であり、この知がなければ、新しい時代の創出は難しいと考えられている³。このような流れは、世界中でおきており、アルバーノ大学（米国・ウィスコンシン州）が開発した能力ベースのカリキュラムをはじめ、教師が教える（teaching）だけではなく、学生が主体的に学び（learning）、得た知識をいかに活用するか、その力の養成に向けた取り組みが各大学で行われている⁴。

日本においては、2006年に経済産業省が「職業や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」と定義し、3つの能力と12の能力要素をまとめた。3つの力とは、①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力であり、各々の能力に対し、①主体性、働きかけ力、実行力、②課題発見力、計画力、創造力、③発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力という要素を整理している。これらの力が、従来教育機関が培ってきた「基礎学力（読み・書き・計算等）」と「専門知識（知識や資格等）」を社会で活用するための力になるのである⁵。

さらに、文部科学省では、2012年の中央教育審議会の答申で、現在の成熟社会において求められる能力を以下の4つにまとめている⁶。

- 答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力等の認知的能力
- チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う、倫理的、社会的能力
- 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力

³ 文部科学省中央教育審議会（2008）。

⁴ 筆者らは、2012年にラーニングアウトカムズに基づく能力ベースのカリキュラムの開発ならびに実践について、アルバーノ大学を調査している。その報告は、大橋・岩崎・齋藤（2012a）；（2012b）を参照のこと。

⁵ 経済産業省 社会人基礎力・ウェブサイト。

⁶ 文部科学省中央教育審議会（2012）。

- 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養、知識、経験など、予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる「学士力」

一方、産業界においても、社会が求める能力について調査を実施している。(社)日本経済団体連合会の「産業界の求める人材像と大学教育への期待」と題した2011年のアンケート調査は、採用に際して大学生に期待する素質・態度、知識・能力を、非常に重視する＝5ポイント、重視する＝4ポイント、普通で良い＝3ポイント、余り重視しない＝2ポイント、重視しない＝1ポイントで計算している。回答した594社のうち、最も高かったのが、「主体性」(4.6ポイント)であり、「コミュニケーション能力」(4.5ポイント)、「実行力」(4.5ポイント)、「チームワーク・協調性」(4.4ポイント)、「課題解決能力」(4.3ポイント)と続いている。これらは、日本の大学がこれまで優先課題として考えていた「専門課程の深い知識」(3.5ポイント)、「専門資格」(2.6ポイント)を大幅に上回っている。

この結果は、日本のみならず、米国でも同様の結果が出ており、全米大学・企業協会(NACE: National Association of Colleges and Employers)の2012年のレポートによると、1位が「チームで働く能力」であり、続いて「組織内外でのコミュニケーション能力」、「問題解決能力」「情報収集、活用能力」であった。この結果からも分かるように、大学は、いま、専門知識の修得だけではなく、より広い能力の修得が同時に求められているのである。

1-2. 学びの特徴に応じた情報技術のあり方

「新しい学びの創出」。これが、現在の高等教育機関に掲げられた課題である。香港城市大学⁷では、香港の大学改革のながれを機に、21世紀が求める人材育成の視点からITを活用した教育改革を精力的に行っている。文字通り「いつでもどこでも」「個に応じた」学習を可能にするITの導入、ならびに、教育情報基盤の整備を行うことで、①きめ細やかな指導、②学習の振り返りと定着、③協同作業の支援を活性化させることができる。具体的には、学習管理システムであるBlackboardをほぼ100%の授業で活用し、PCからのアクセスはもちろんのこと、スマートフォン等のモバイルを活用した

⁷ 香港城市大学は、1984年にCity Polytechnic of Hong Kongとして設立され、1994年に大学として認定された比較的若い大学である。経営、工学、人文社会、メディアなど7つの学部と30を超えるリサーチセンターを有し、約20,000名の学生が在籍する総合大学である。また、近年、急成長を遂げており、QS World University Rankingsにおいて、2004年に198位であったのが、2012年には95位と大きく評価を上げている。

m-Learningによる学習環境の整備も行っている。さらに、eポートフォリオを導入することで、課題に対する教師からのフィードバックや学生同士の相互評価、また、学習の記録を通じて、振り返りと定着を確実なものにしている。

このような情報技術の教育への導入は、いまや世界中の大学で広がりを見せている。海外のeラーニングの調査によると、米国では約560万人の学生が少なくとも1科目はオンラインコースを受講しているという。日本では、そのような調査がないものの、オンラインコースの授業を実施している大学が全体の16.0%であり、そのほとんどが「1割～3割の科目で実施」と回答していることから、米国と比べて利用率が低いことが推測される。また、米国では、Second Life (約50%)、Wiki (約30～40%)、eポートフォリオ (約40～50%)、英国では、SNS (81%)、Blog (59%)、Wiki (51%)、eポートフォリオ (25%) と、双方向性を持つツールが多く大学の活用されている。一方、日本では、知識伝達型のツールであるパワーポイント等のスライドが85.9%、Web教材が69.3%、ストリーミングビデオが46.0%と利用率が高いものの、双方向性のツールであるBlogが11.4%、Wikiが8.4%、SNSが6.4%と低く、eラーニング先進国との差が浮き彫りになっている⁸。

米国・英国と日本のツールの利用に対する差はどこからくるのか。これは、学びのどの部分でメディアを利用するか、そこに関わる問題でもある。この点を人類の歴史になぞらえて整理したものにサンバーク氏の研究がある。この研究では、「Campfire (キャンプファイアー)」「Watering hole (水飲み場)」「Cave (洞穴)」「Mountain Top (山の頂)」の4つのスペースとそこで行われる学びをまとめ、それに適したツールを整理している (表1-1)⁹。

表1-1 サイバースペースとメディアの活用

スペース	特徴	学びの場	情報技術
Campfire (キャンプファイアー)	知識と情報を他の人と共有する場	生徒が教員を取り囲み、学ぶ	TV-system, Chat, Video
Watering hole (水飲み場)	日常的なことから専門的な知識まで、互いに話し合い、意見交換をする場	グループ作業を通じて、意見交換	SNS, 掲示板
Cave (洞穴)	一旦、人々との集まりからはなれ、自分自身で意味をつくるために孤立的な作業を行う場	学びを振り返り、意味を創造	eポートフォリオ
Mountain Top (山の頂)	知識と理解を公に示す場	成果の発表、公開	SNS, Web

(出所) Thornburg (2004) 等の参考資料に基づき筆者作成。

⁸ 放送大学 大学教員のためのICT活用ヒント集・ウェブサイト。

⁹ 表1-1は、Thornburg (2004) の論文と筆者が2013年9月24日にApple Hong Kongにてレクチャーを受けた内容に基づき、筆者が作成した。

サンバーク氏の理論に即して言えば、米国、英国といった e ラーニング先進国では、すでに、各種ツールを活用し、Watering hole で、双方向の議論あるいは意見交換を行い、Cave において、振り返りを行う。そして、Mountain Top で、成果を発表しているのである。それに対し、日本では、大半が Campfire の段階でのツールの利用にとどまっていると言える。

今後、日本では、知識伝達型のツールの活用だけでなく、双方向のツールを活用することで、「学習パラダイム」が示す新しい学びを支援し、その学びを創発することができるのではないかと考える。

2. eポートフォリオが拓く学びの可能性

2-1. eポートフォリオとは

eポートフォリオとは、学習成果や学習過程、資料を保存し、共有するためのシステムである。そこに組み込む活動には、ゴール設定やルーブリックの作成・確認、学習成果物の作成および収集、評価活動、eポートフォリオのセレクション、公開 (show-case) があり、評価活動には、自己評価 (self-assessment)、相互評価 (peer assessment)、教師や専門家などによる教師評価・他者評価がある。これらの機能を備えることで、学習者は、学習目標にむかって、資料を収集し、学習履歴を残しながら、課題を作成する。また、課題作成のプロセスにおいて、相互評価や教師からの指導を得ることで、より課題をレベルの高いものへと発展させ、最終的には、公開まで至らせることができる¹⁰。

eポートフォリオは、学びの諸活動を評価する有効なツールとして期待され、多くの教育機関で活用が試みられている。しかし、種々の eポートフォリオに関する研究を調べてもその概念や役割は多様であり、普遍的な eポートフォリオのデザインが存在しているわけではない。そのため、eポートフォリオの概念は依然として分かりにくく、eポートフォリオの有効性が実感できない、あるいは、導入に踏み切ることができない教育機関も多い。

森本は、Barrett の研究を用いて、eポートフォリオ活動の側面を表 2-1、図 2-1 のように整理している¹¹。

図 2-1 では、4つのポートフォリオが記されている。ラーニング・ポートフォリオとは、学習プロセス全体を通して、学習を支援するツールであり、ディベロップメント・ポートフォリオは、長期間にわたる継続的な自己・専門性を高め成長を促すツール、アセスメント・ポートフォリオは学習成果と学習活動を結びつけるツール、ショーケース・

¹⁰ 森本 (2011)、p.426。

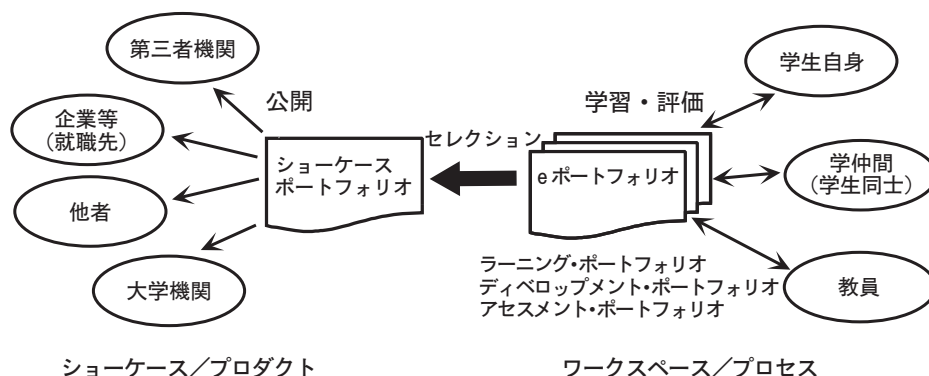
¹¹ 森本 (2011)、p.427。

表 2-1 eポートフォリオ活動の二側面

	ショーケース／プロダクト	ワークスペース／プロセス
主目的	ショーケースおよびアカウントビリティの構成	学習におけるリフレクションの誘発・促進
eポートフォリオの種類	ショーケース・ポートフォリオ	ラーニング・ポートフォリオ、ディベロップメント・ポートフォリオ、アセスメント・ポートフォリオ
種活動	成果を発表する	協調的に学び成長する
構成・編成	テーマ別	時系列・年代順
リフレクション	回顧的なリフレクション（過去のことについての振り返り）	現在におけるリフレクション（学習の成果や経験についての即時的な振り返り）
評価	総括的評価（一定期間の学習が終了した後行う評価）	形成的評価（一定期間の学習の途中に行う評価）
引証物	達成したこと	学んだこと
用途例	教育の質保証・質向上のためのアカウントビリティ	学習・評価の促進，自己成長・専門性育成の引証化

（出所）森本（2011）より。

図 2-1 eポートフォリオ活用の二側面



（出所）森本（2011）より作成。

ポートフォリオは、ベストワークを集めたポートフォリオで自身の能力やスキルを公に公表するために用いるポートフォリオである¹²。

このように、一言で「eポートフォリオ」といっても、学生のどのような学びや能力の育成を支援するかによって、eポートフォリオのデザインや機能が異なってくるので

¹² 筆者らが所属する金城学院大学には、学生のキャリア支援を行う「K-カルテ」がある。ここでは、教員や就職・キャリア関連スタッフが、学生ひとりひとりの成績、資格取得状況、「将来の夢」や「目標」を共有し、キャリア開発、就職活動に役立てている。これは、森本の分類に従えば、ディベロップメント・ツールの自己成長を促すポートフォリオに分類される。

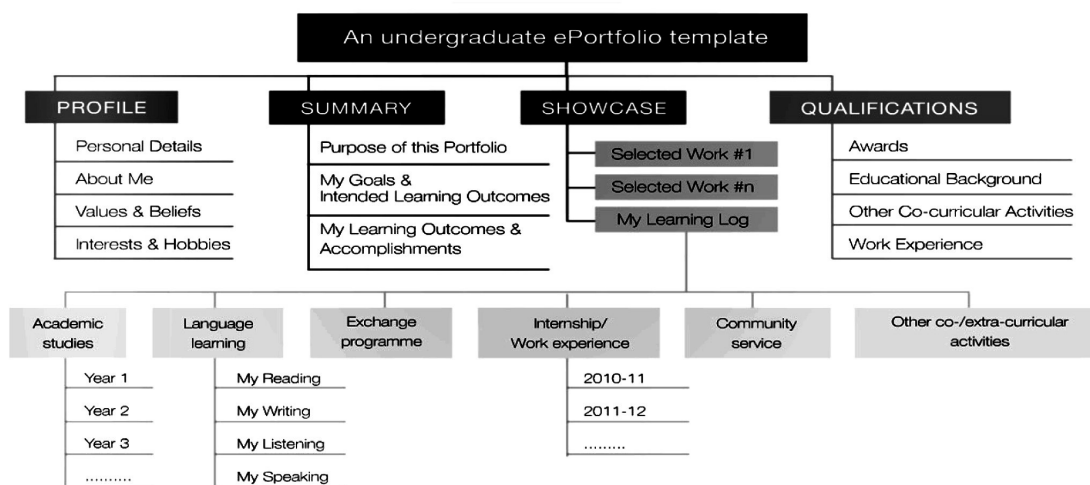
ある。これをどのように教育機関が選択し、活用していくか、様々な大学で趣向を凝らした工夫がなされている。

2-2. 香港城市大学におけるeポートフォリオ

全項で述べたように、eポートフォリオには様々な目的、機能、デザインがあることが分かった。そのため学習支援からキャリアまで、異なる目的を持つeポートフォリオを1つのデザインで使うのではなく、例えば、金沢工業大学のように、行動履歴を記録する「修学ポートフォリオ」やキャリア支援を行う「キャリアポートフォリオ」等、用途を分けて利用しているところも多い。

香港城市大学におけるeポートフォリオの活用も、図2-2に示すようにeポートフォリオの概要は提示しながらも、ひとつの定まったデザインを提供するのではなく、学生、あるいは、教師が、その目的にあったテンプレートを活用できるようにしている。

図2-2 eポートフォリオ・テンプレート

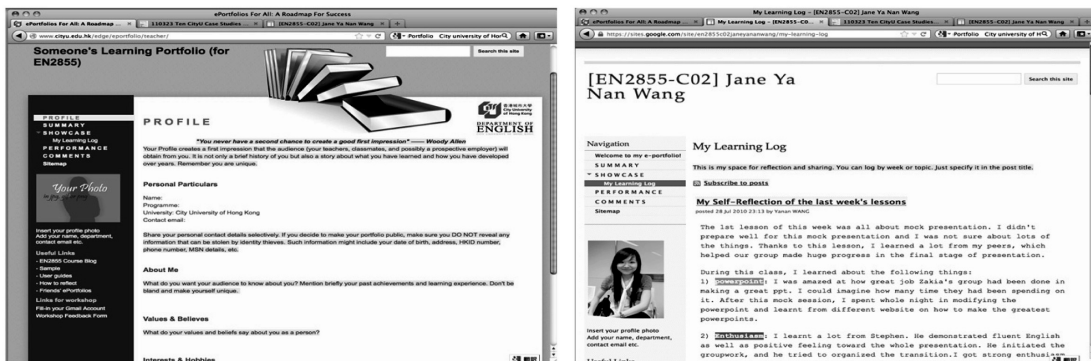


(出所) 香港城市大学「Integrating ePortfolios into Teaching and Learning: 10 CityU Case Studies」より。

(1) 学びの記録

ある授業では、週ごとに授業で学んだことをeポートフォリオで記録し、学習の振り返りと定着を促している。具体的には、「Showcase」の中に「My Learning Log」のページを作り、そこで、第何週目に何をしたか、その記録を蓄積している。また、単に学んだことを記録するだけでなく、記録したものを学生間や教員との間で共有することができるようにしている。

図 2-3 eポートフォリオ・テンプレート (左) と事例 (右) 1



(出所) 香港城市大学学生のポートフォリオより。

(2) 学生の経験の記録

ある授業では、夏休みの間に、他大学の授業やワークショップに参加したり、種々の経験を重ねることで知識を深める学びを行っている。この授業では、学生が学んだ事柄や経験をひとつのポートフォリオにまとめるという作業を行っている。具体的には、「Documentation」で、実際に学んだ事柄を、「Reflections」で授業の振り返りを、「Plans for Improvement」で自己評価と今後の目標をまとめている。

図 2-4 eポートフォリオ・テンプレート (左) と事例 (右) 2



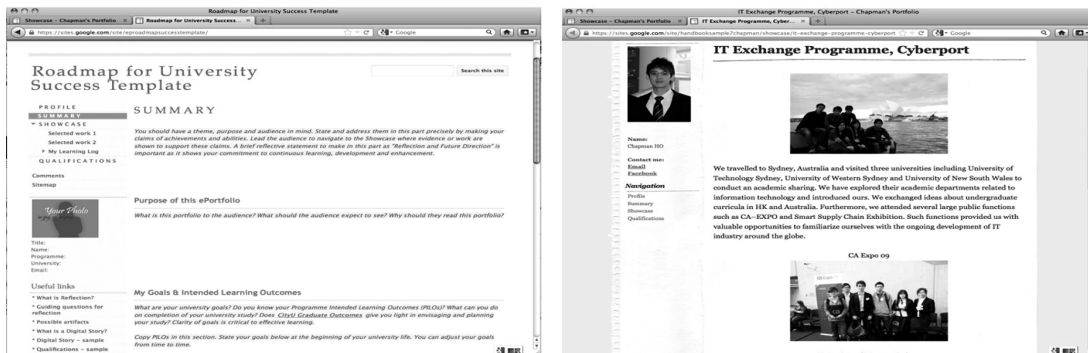
(出所) 香港城市大学学生のポートフォリオより。

(3) 就職活動のPR

ある学生は、自分の将来の目標、履修した授業とその成績を「Qualifications」に、短期留学のエピソードやインターンシップのこと、クラブ活動等、実際に行った活動やその成果を「Showcase」に記録し、それを一般公開することで、多くの人に自分をアピールしている。これにより、大学の学びを整理し、何を学んできたかを振り返るとも

に、学んだことをアピールして就職活動に役立てている。

図2-5 eポートフォリオ・テンプレート(左)と事例(右) 3



(出所) 香港城市大学学生のポートフォリオより。

以上、3つの例をここに上げたが、このように、学びの目的に応じてeポートフォリオを活用することで、学生の学びを強固に支援し、能動的で自律的な学びを促すのである。

3. 高等教育改革下の香港大学

3-1. 学制改革と香港大学

香港大学(The University of Hong Kong)は、1911年に大学として認可され、翌年から正式にスタートした香港最古の総合大学である。2010年から2012年にかけて100周年を記念した企画や事業が行われてきた。

香港大学は、建築、芸術、経営・経済、歯学、教育、工学、法学、医学、自然科学、社会科学の10学部を誇り、32の学術センターを有している。学部学生数は23,033名(+約3,400名)、大学院生数は8,188名、教職員6,517名(うち教員は1,041名)である¹³。2012年にQS World University Rankingsで23位、『タイムズ』誌のWorld University Rankingsで35位であった。アジアを代表するグローバルユニバーシティの1つである。

前述のように香港では学制改革が行われている。もう少し長期的のスパンでとらえると、中国への香港返還後の社会経済的環境も高等教育改革に関連している。香港返還後は中国語(広東語)で初等・中等教育がなされてきたために、英語で高等教育を受けられる

¹³ 学部学生数23,033名(+約3,400名)というのは、香港の学制改革のためである。2012年9月に旧制度の3年制大学に入学した学生に加えて、新制度の4年制大学に入学した約3,400名がいることを示している。

人口が少なくなっている。実際英語話者は40%弱である。しかも返還後に急速に拡大した所得格差も高等教育を受けられる人口を経済的に限定している。他方、大学進学率はかつて2、3%であったが、現在は20%強であり、大学（定員）の増加とともに教育水準も低下してきたとも言われている。

そのような中、香港大学はこの学制改革を次の3つを行う機会と位置づけている。すなわち、(1)大学がカリキュラムを再考し、批判的に再点検する、(2)優れて学生中心の学習経験を提供するという公約を再確認する、(3)国際的アウトリーチと国際的展望をもつことで際立っている教育を促進する、こうした機会である。学制改革に伴うカリキュラム改革の方向性は(2)に関連しており、一言でいえば、教員が「何を教えるか」(teaching)から学生が「何ができるようになるか」(learning)への転換である。ラーニング・アウトカムズ重視と言い換えられよう。その新たなカリキュラムにおいては、表3-1に見られるような諸能力を学生が開発することを狙っている。

表3-1 香港大学の新たな教育目標

<p>学問的・専門的に卓越すること、批判的な知的思考と一生涯にわたる学習の追求 専門的な学問分野及び職業に関する深い知識の開発 高水準の知的厳密性及び学問的完全性の維持 多角的視点から批判的に受容した知識 知的的好奇心と学修への意欲の保持</p> <p>未知の状況とまだ明白となっていない問題に取り組むこと 予期しない状況や問題への積極的対応 馴染みのない状況における問題の特定と明確化 問題に対する革新的解決策の作成と評価</p> <p>批判的な内省、他者のよりよい理解、個人的・専門的倫理の堅持 学問的、社会的、職業的な舞台における高水準の人格と倫理観の維持 人間的な強さと弱さの自覚の強化 個人の差異と選好の尊重</p> <p>異文化理解とグローバル・シチズンシップ 自文化と他文化の自覚の強化 多様な文化をもつ人々とかかわる文化的感受性と対人スキルの開発 グローバル・コミュニティの一員としての社会的責任の行使</p> <p>コミュニケーションとコラボレーション 学問、職業、社会の場面における効果的なコミュニケーション 他者と協働し、建設的な貢献をなすこと</p> <p>人類の環境改善に向けてのリーダーシップと擁護 市民同胞及び人類の福利向上における主導的な役割の行使 民主的社会、人権、正義、平等、言論の自由という中核的価値の堅持 地域及びグローバルレベルの社会的、経済的、環境的持続性促進への積極的関与</p>

(出所) 香港大学Teaching & Learningウェブサイトより。

3-2. 香港大学が取り組む教育システム改革 — 共通コア —

香港大学は2012年にカリキュラム改革を行い、全学を通じた共通の学習経験として、(1)学問(学際)的探求、(2)多分野のコラボレーション、(3)多様な文脈での問い、(4)多様な学習経験、(5)学習・評価の多様な形態、(6)地域及びグローバル・コミュニティへの関与、(7)市民的・道徳的価値観の開発を挙げている。

表3-2は、2010カリキュラム(3年制)と2012新カリキュラム(4年制)の比較である。3年制の180単位から4年制の240単位へと60単位増えている。必修(共通コア、英語、中国語)が単位数としても卒業要件単位に占める割合としても大きくなっている。なかでも、共通コアは12単位から36単位へと単位数が3倍になっており、2012新カリキュラムの特徴をなしている。

表3-2 2010カリキュラム(3年制)と2012新カリキュラム(4年制)との比較

カリキュラム		2010カリキュラム		2012新カリキュラム	
要件	コース	単位数	比率	単位数	比率
必修	共通コア	12	11.7%	36	22.5%
	英語	6		12	
	中国語	3		6	
専門	主専攻	60-96	33.3%-53.3%	72-96	30.0%-40.0%
	副専攻	36-48	20.0%-26.7%	36-48	15.0%-20.0%
選択		残り	8.3%-35.0%	残り	17.5%-32.5%
総計		180	100.0%	240	100.0%

* 6 単位 = 120 - 180 時間の学修

(出所) 香港大学Teaching & Learningウェブサイトより。

共通コアの目標は次の通りである¹⁴。

- 学生が日常生活で直面する諸問題の複雑性及び関連性を、幅広い視点から批判的に理解できるようにする
- 学生が自文化及び異文化、諸文化間の相互連関を尊重できるようにする
- 学生が地域社会だけでなくグローバル社会の一員であることを自覚し、こうしたコミュニティにおける責任ある個人・市民として積極的な役割を果たせるようにする
- 学生が自らの学術研究をさらに高めるようなカギとなる知的スキルを開発できるようにする

¹⁴ 香港大学共通コア・ウェブサイト。

共通コアは、「人類の共通経験を探求することを通じて、学生が人間という存在の相互関及び相互依存を学ぶ」ものである¹⁵。より具体的には次のことを対象とする。

- ・ アイデア及び感情の美的（あるいは象徴的）表現
- ・ 個人とコミュニティの関係、後者における前者の役割
- ・ さまざまなレベルにおけるコミュニティ間の相互作用
- ・ 人間、科学、テクノロジー、自然の間関係と相互依存
- ・ 集団内及び集団間において人をつなぎ、緊張を緩和するのに不可欠な信仰と価値観
- ・ 過去、現在、未来の関係

現在約150の授業で構成されている共通コアは、(1)科学的・技術的リテラシー、(2)人文学、(3)国際問題、(4)中国：文化・国家・社会の4分野に括られている。授業科目名は、特定のディシプリンに沿ったものというよりもむしろ、トピックまたはテーマを設定してそれに学問的・学際的アプローチを行うようなものになっている。ここでは(3)国際問題に含まれる「CCGL9030 金融危機を理解する」を具体的に取り上げよう。この授業のラーニング・アウトカムズは次のように定められている¹⁶。

- ・ 金融危機の社会経済的背景と考えられうる原因を特定し、いかにしてその危機が異なる金融的・経済的経路を通じて悪化し、世界の他の国々に影響を及ぼしたのかを説明できるようになる
- ・ 1つの問題への対応がしばしば次の問題の原因を作り出すことを理解して、経済開発に関する決定的に重要な疑問の考察を行えるようになる
- ・ 不安定な経済を救済する様々な政府政策の有効性を批判的に評価し、グローバル経済においてはある国におけるこうした政策が他国に影響を及ぼすことがあることを理解できるようになる
- ・ もし可能だとしても、危機を取り除くのはきわめて費用がかかるので、危機がほぼ確実に再発することを説明できるようになる
- ・ いかにして現在の危機がグローバル経済の将来的な成長・発展経路を形成するか理解できるようになる

授業は講義とチュートリアルがセットとなっている。聞き取りによると、1年生中心

¹⁵ 香港大学共通コア・ウェブサイト。

¹⁶ 香港大学共通コア・ウェブサイト。

の入門的な授業の履修者は100名を超えることがあるが、専門的な授業になると10～20名程度だと言う。チュートリアルは原則12名以下の少人数で実施されるという。そうしたチュートリアルで評価対象となる様々な課題が課されることになっており、その他宿題なども合わせると、この授業の単位修得には150時間の学習時間が必要とされる（表3-3）。

表3-3 「CCGL9030 金融危機を理解する」の学習時間

活 動	時 間
講義	24
チュートリアル	12
リーディング／自習	50
ビデオ視聴	10
評価：グループプロジェクトに関する個人レポート	10
評価：グループプロジェクトのグループ・プレゼンテーション	20
評価：事例解説と宿題	20
評価：自宅に持ち帰る試験	4
合計：	150

（出所）香港大学共通コア・ウェブサイトより。

4. 変貌する学習環境 — ラーニング・コモンズ —

4-1. ラーニング・アウトカムズとラーニング・コモンズ

「知識の伝達」から「知識の創出・自律的学習」への学習理論の変化は、必然的に「学生の主体的な学修」やラーニング・アウトカムズの重視を導いた。他方、大学図書館の「危機」「不要論」、デジタルネイティブ世代の学習スタイルは、図書館の再定義を要請している。そうした中、北米の大学図書館に設置されたインフォメーション・コモンズもしくはラーニング・コモンズが目ざされている¹⁷。実際、日本の大学においても2000年代に入り図書館などにラーニング・コモンズを設置したり、図書館自体を大きく見直したりしているところが増えている。その勢いは近年ますます増している。

日本におけるこの傾向について、竹内比呂也氏（千葉大学文学部教授、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長）は批判的かつ建設的な見方をしている。すなわち、ラーニング・コモンズが図書館に設置されたからこそ実現できることが、「今日の大学教育あるいは大学のミッションとどのようにかかわっているのか」と問い、「これに対する答を、今の日本のラーニング・コモンズから見いだすことは難しい」（原文ママ）

¹⁷ ラーニング・コモンズについては、加藤・小山編訳（2012）、山内他（2010）を参照のこと。図書館にラーニング・コモンズが設置されるケースが多いが、図書館外に設置されているケースもある。

と言う¹⁸。日本のラーニング・コモンズは「空間」(形)としては存在してもそこに「機能」(精神)が備わっていないからである。

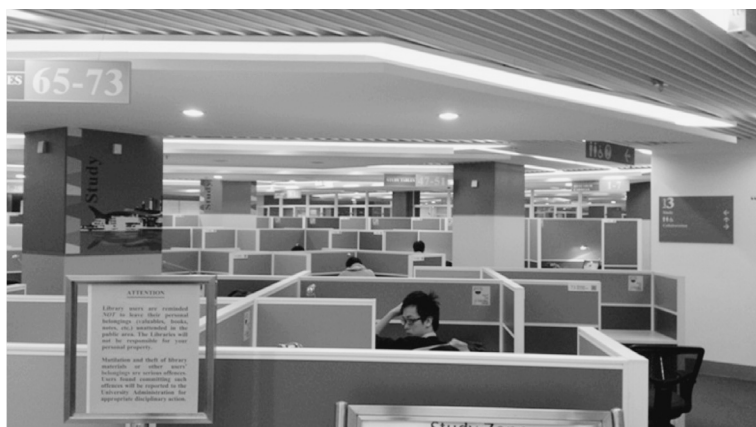
単に様々な情報機器を備えた、快適なグループ学習空間であることを超えて、コンテンツ利用を促すような各種のナビゲーション、サポートを提供し、コンテンツを活かした学習を能動的に行える学生を育成するという機能を実現する好機である¹⁹。(傍点は筆者)

「コンテンツを活かした学習を能動的に行える学生を育成する」ことは、「学生が何ができるようになるか」というラーニング・アウトカムズ重視に通じている。それは今日の大学に寄せられている要請である。北米の大学図書館は、ライティング支援やコンテンツ活用の学習支援の長い伝統をもつが、そうした伝統の上に、大学に寄せられている今日的な要請に応えるラーニング・コモンズが設置されていると理解できる²⁰。俗な言い方をすれば、ハードとソフトが一体となっているのである。ラーニング・コモンズはラーニング・アウトカムズを志向した学習に不可欠なものであるといえよう。

4-2. 香港大学のラーニング・コモンズ

ここで香港大学のラーニング・コモンズについて簡単にみておこう。香港大学においても図書館にラーニング・コモンズと呼べるスペースが設置されている。図4-1は自

図4-1 香港大学図書館本館の自立学習スペース



2013年1月19日、筆者撮影。

¹⁸ 竹内 (2012)、p.278。

¹⁹ 竹内 (2012)、p.279。

²⁰ 北米図書館に関しては、筆者はシカゴ大学を訪問し、2011年5月に開館したばかりのJoe and Rika Mansueto Libraryについての説明を受けた(大橋・岩崎・齋藤(2012a))。

立学習スペース、図4-2は協働学習スペースの様子である。またデザイン性が高く座り心地の良いソファを配置し、飲食、会話が許された開放的な空間も設けられている。

図4-2 香港大学図書館本館の協働学習スペース



2013年1月19日、筆者撮影。

自立学習スペース、協働学習スペースは共に、HKU Portalを通じて使用予約をすることができる²¹。HKU Portalは、2010年に新たにスタートしたシングルサインオン型のプラットフォームである。これは、学生情報システム（SIS; Student Information System）、人的資本管理システム（HCMS; Human Capital Management System）、キャンパス情報サービス（Campus Information Services）を統合したものである。

HKU Portalはさまざまな図書館サービスを提供する。図書館司書への問い合わせや相談、データベース利用、電子ジャーナルの利用は言うまでもない。それに加えて大別すると、図書館使用に関する予約と、図書館が提供するサービスの申し込みができる。たとえば、前者には、図書館の座席、個人閲覧スペース、協働学習スペース、AV視聴スペースの予約などが含まれる。後者には、図書購入リクエスト、図書の貸出、各種資料の取り寄せなどが含まれる。

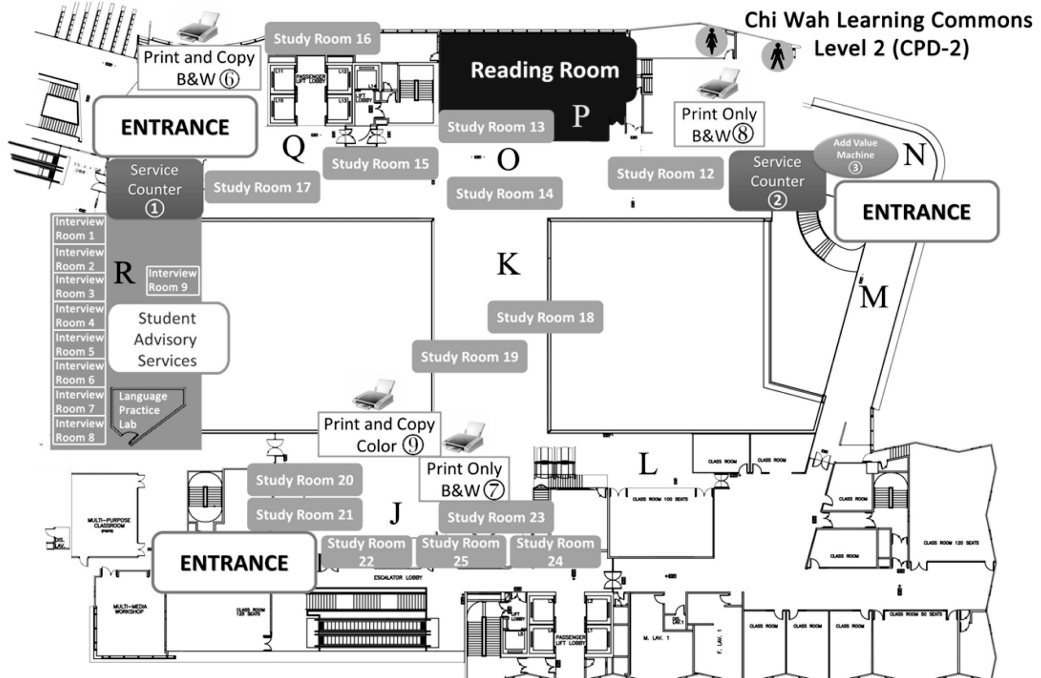
香港大学は、100周年記念事業の一環として、智華館（Chi Wah Learning Commons）というラーニング・コモンズ棟を竣工した²²。智華館には、多くの演習室のほか、個人閲覧スペース、ラウンジ、協働学習スペース、ランゲージ・ラボ、喫茶スペースなどが設けられ、多様な学習が可能になっている（図4-3）。全館Wi-Fi接続

²¹ HKU Portalの概要については、岩崎・大橋（2013）を参照のこと。

²² 100周年記念事業の一環として新築された建物の教室には、いわゆる講義室、演習室ではない、新たなタイプの教室も試験的に設けられている。

ができ、PC、プリンターやコピー機も利用できる。協働学習スペースにはモニター、プロジェクターとスクリーン、PCなどが備えられ、Mimio White Boardも利用できる。これらは情報技術サービス部門によって管理されている。

図4-3 香港大学智華館2階のレイアウト



(出所) 香港大学情報技術サービス部門・ウェブサイトより。

智華館はラーニング・コモンズとして「空間」だけでなく「機能」も十分に有している²³。学生支援サービス (Student Advisory Services) が置かれているからである。簡単に言うと、それは、(1)学修支援室 (AAO; Academic Advising Office) の提供する1対1のアドバイス、(2)応用英語研究センター (CAES; Centre for Applied English Studies) の英語ライティング指導、(3)学生開発・資源センター (CEDARS; Centre of Development and Resources for Students) の提供するキャリア開発、体験・研修学習、学生生活などの学修以外のアドバイス、(4)大学図書館の提供する各種サービスで構成されている (表4-1)。表4-1に見られるように、智華館が提供す

²³ 聞き取りによれば、香港の住宅事情は学生にとって厳しいものであるという。非常に家賃が高く、契約更新時には家賃の大幅な引き上げに直面するため、自宅で良好な学習環境を有することは難しい状態にある。そのことも大学が快適な学習環境を提供する理由の一つである。

るラーニング・コモンズの諸機能は、ラーニング・アウトカムズ重視の教育に欠かせないものである。

表 4-1 香港大学智華館が提供するラーニング・コモンズの諸機能

<p>学修支援室</p> <ul style="list-style-type: none">大学での学習への順応及び学習計画の立案履修上の諸制限及び学部を超える学修機会の指導弱さのある履修領域への対応大学院での研究のための計画アカデミックな成功を達成するためのキャンパス諸資源の活用
<p>応用英語研究センター</p> <ul style="list-style-type: none">ティーチングアシスタントからの助言を得るどのように課題を分析し計画するかを学ぶどのように書き手として成長するかを学ぶアカデミック及び文学的ライティングにおけるライティング技術を開発する
<p>学生開発・資源センター</p> <ul style="list-style-type: none">キャリア開発奉仕・体験学習機会ジェネリック・スキル（時間管理、学習・生活スキル、個人的成長など）キャンパスライフ計画（経済的管理、住宅ニーズなど）大学生活計画（目標設定、学習計画、文化的意識など）
<p>大学図書館</p> <ul style="list-style-type: none">図書館のサービスと設備を使用できる検索戦略を身につける本学図書館目録及び論文データベースなど、情報資源を検索できる詳細な情報検索のための個人的相談の設定

（出所）香港大学情報サービス部門ウェブサイトより。

4、5での議論を通じて、香港大学がラーニング・アウトカムズを重視した教育を志向していて、共通コアをはじめとする授業にその考えが貫かれていることが明らかになったであろう。また、それを実現する一助とするため、ラーニング・コモンズを設置していることも見てきた。ラーニング・コモンズという「空間」があるだけでなく、「機能」も十分に備えている。そこに大学の教育システムや学習環境が、大学教育や大学のミッションとどうかかわっているかの答えの一例を知ることができる。

おわりに

近年の高等教育の学びの変革は、単に teaching から learning に視点を移しただけに止まらず、教育手法から、評価方法、カリキュラム、学習環境に至るまで、様々な点で改革をよぎなくしている。本論では、社会が求める能力について議論を行い、その能力

を養成するために有効なツールである e ポートフォリオについて述べた。さらに、ラーニング・アウトカムズに基づくカリキュラムについて調査を行い、最後に、学生の自律的な学びを支援するラーニング・コモンズについて考察した。高等教育機関は、いま、学びそのものから学習環境に至るまで、learning に基づく見直しと改革が必要なのである。

[参考文献]

書籍・論文・雑誌

- 岩崎公弥子・大橋陽. (2013). 「個の学びを支援し、「知識」と「能力」を育む教育情報基盤に関する研究 — 香港の高等教育事情と教育情報基盤に関する一考察 —」『金城学院大学人文・社会科学研究所報』第18号、pp. 19-28.
- 大橋陽・岩崎公弥子・齋藤民徒. (2012a). 「教育システム構想のためのアメリカ大学事情視察 — アルバーノ大学とシカゴ大学を訪問して —」、『金城学院大学人文・社会研究所報』第17号、pp. 36-50.
- 大橋陽・岩崎公弥子・齋藤民徒. (2012b). 「ラーニングアウトカムズと個を重視した教育システムの構想 — アルバーノ大学を手掛かりに —」、『金城学院大学人文・社会研究所紀要』第16号、pp. 1-31.
- 加藤信哉・小山憲司編訳. (2012). 『ラーニング・コモンズ — 大学図書館の新しいかたち —』勁草書房.
- 竹内比呂也. (2012). 「“ラーニング・コモンズ”を超えて — あとがきに代わる、日本の大学図書館への問いかけと期待 —」、加藤信哉・小山憲司編訳. 『ラーニング・コモンズ — 大学図書館の新しいかたち —』勁草書房、pp. 277-279.
- 森本康彦. (2011). 「高等教育における e ポートフォリオの最前線」、『システム/制御/情報』Vol. 55、No. 10、pp. 425-461.
- 文部科学省中央教育審議会. (2008). 「答申 新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216131_1424.html (検索日2013年5月31日)
- 文部科学省中央教育審議会. (2012). 「答申 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (検索日2013年5月31日)
- 山内祐平・林一雅・西森年寿・椿本弥生. (2010). 『学びの空間が大学を変える — ラーニングスタジオ、ラーニングコモンズ、コミュニケーションスペースの展開 —』ボイックス株式会社.
- David D. Thornburg. (2004). "Campfires in Cyberspace: Primordial Metaphors for Learning in the 21st Century." *International Journal of Instructional Technology & Distance Learning*. Vol. 1. No. 10. : http://www.itdl.org/Journal/Oct_04/invited01.htm (検索日2013年5月31日)

ウェブサイト

経済産業省 社会人基礎力ウェブサイト：<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>（検索日2013年5月31日）

(社) 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果2011年」ウェブサイト：<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/005/gaiyo.pdf>（検索日2013年5月31日）

放送大学「大学教員のためのICT活用ヒント集」ウェブサイト：<http://fd.code.ouj.ac.jp/tips/qanda/q112.html>（検索日2013年5月31日）

香港大学ウェブサイト：<http://www.hku.hk/>（検索日2013年5月31日）

香港大学共通コア・ウェブサイト：<http://tl.hku.hk/common-core-curriculum/>（検索日2013年5月31日）

香港大学情報サービス部門ウェブサイト：<http://www.its.hku.hk/services/tl/lc/menu>（検索日2013年5月31日）

香港大学Teaching & Learningウェブサイト：<http://tl.hku.hk/tl/>（検索日2013年5月31日）

NACE (National Association of Colleges and Employers) "Job Outlook: The Candidate Skills/Qualities Employers Want" ウェブサイト：http://www.nacweb.org/s10262011/candidate_skills_employer_qualities/（検索日2013年5月31日）